

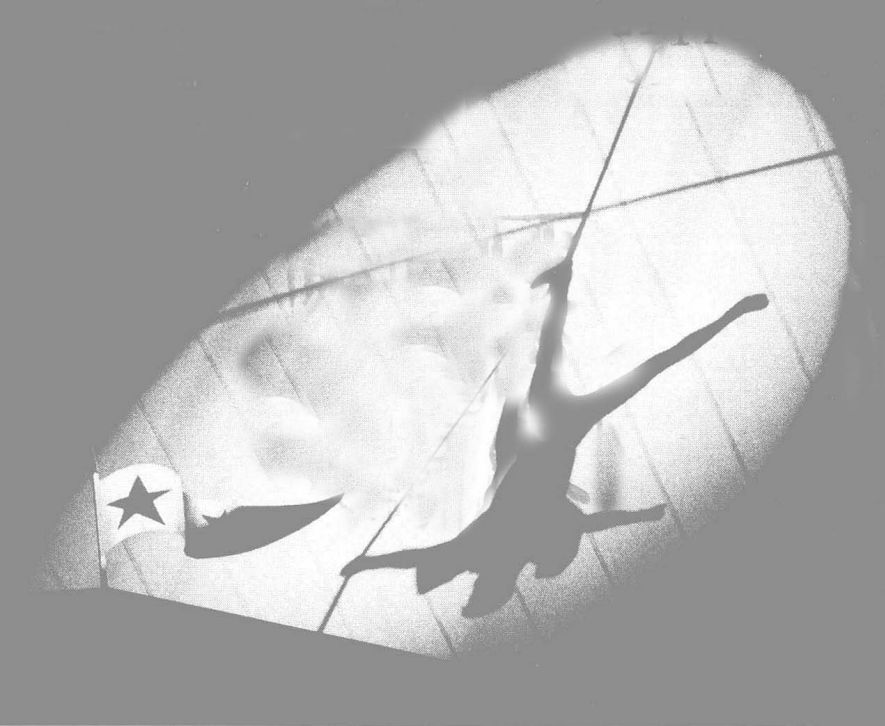
Circus Dream

サーカス・ドリーム

二十世紀少年読本

川西蘭





サーカス・ドリーム

——二十世紀少年読本

一九八九年八月二十五日 第一刷発行

著 者 川西 蘭

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

（三） 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

出版部（〇三）二二〇—六一〇〇

電話 販売部（〇三）二二〇—六三九三

製作課（〇三）二二〇—六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 R. KAWANISHI. Printed in Japan

ISBN4-08-775132-5 C0093

目次

魔術師の少女	5
ピエロ三兄弟	33
象	65
海からくる夢	99
空中ブランコ	131
ペテン師	173
あとがき	204

カバー絵

北見 隆

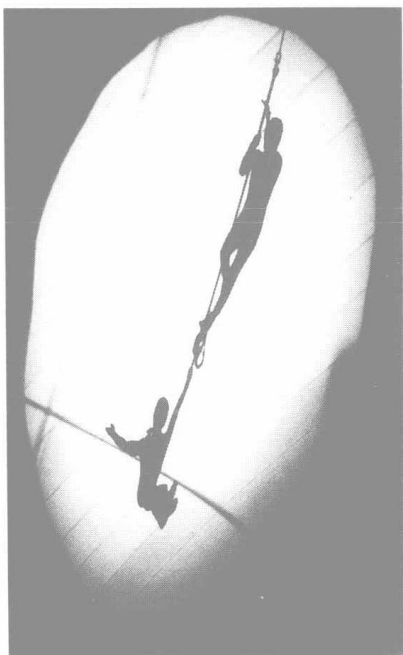
扉・本文写真

小瀧達郎

デザイン

岡 邦彦

サーカス・ドリーム



魔術師の少女

いつか君がわたしと同じ年になるのか、と思うと、少し胸が苦しくなる。無邪気な寝顔を見せている君が、わたしと似たような道を歩くとは限らない。そうならないことをわたしは祈っている。君はわたしのことを二十年たっても覚えていてくれるだろうか？ 忘れて欲しい、とも思う。けれど、こうして君に手紙を書いているのは、忘れて欲しくないという気持ちもあるからだろう。君が感じているほど、今のわたしは大人ではない。それは、たぶん、この手紙を読む年になった君には分かるに違いない。

去年の夏、ぼくは久し振りに実家に戻った。家族や親戚の法事が重なって、まとめて出席しなければならなかったし、古くなった家を建て替える準備もしなければならなかった。

そんな機会でもなければ、十日も休暇を取って、実家に戻るようなことはしない。普段、せせこましく仕事をしているから、休暇が取れた時には、のんびりとできるところに逃げ出してしまう。

実家に戻っている間、天候は実に目まぐるしく変わった。夏の強い陽射しが照りつける、ひどく暑い日もあれば、しとしとと冷たい雨が降る肌寒い日が続いたりもした。

ぼくは夏物の黒い服を着て、親戚の家を訪れたり、墓参りをしたり、あまり顔をよく知らない人たちと酒を飲んだりした。

寺の住職に呼ばれたのは、そんな慌しい行事が終わり、実家を離れようとする頃だった。その日は、朝から強い陽光が輝く暑い日だった。ぼくはエアコンもついていない車で寺を訪れ、額や首の汗を拭いながら、住職に会い、一連の法事の礼を言った。

通された部屋からは手入れの行き届いた庭が見えた。大きな樹木と蟬の鳴き声。寺の庭はぼくが子供だった頃と何も変わっていないかった。

住職は涼しそうな法衣を纏って、正面にちよこんと座った。年を取るにつれて、体が小さくなっていく見本のようだ。ぼくは出された麦茶を一口飲むと、足を崩した。短い時間

でも正座をしているのは、苦痛だった。

住職はなかなか用件を切り出さなかった。

懐かしむように、観察するように、ぼくをじっと見つめていた。

麦茶を飲み終わり、汗が乾いた頃になって、ようやく住職は一通の手紙を懐から取り出し、ぼくの前に置いた。

「あなたのおじさんから預かったものです」

封筒は黄ばんで、ところどころに茶色い染みがついていた。宛名は確かにぼくの名前になっていて。裏返してみただけで、差し出し人の名前はなかった。

「御家族にはお話しにならない方が良いでしょうね」

住職はそれだけ言うと、静かに立ち去って行った。ぼくは手紙を上着の内ポケットに入れ、寺を後にした。車に乗り込むと、蟬の鳴き声が一瞬途切れ、樹木の葉むらが突風に揺れ、ざわめいた。

叔父はぼくがまだ小学生の頃に亡くなった。

ぼくたちの家族とはそれほど親しい付き合いをしていたわけではなかった。

そんな叔父がひょっこりと家に現れ、数日間滞在したことがあった。背の高い、ちょっと崩れた感じのする（それは都会に住んでいる人に感じられたものだ）男だった。

叔父はぼくの部屋に寝泊まりし、遊び相手になってくれた。叔父に近づくと、彼の体からは甘酸っぱい匂いがした。

両親は叔父の滞在を快く思っていないようだった。食卓からは笑いが消え、両親は声をひそめて、口喧嘩をした。叔父はそんなことにはまるで無頓着にすごしていた。

ぼくは彼が好きだった。たとえば彼がぼくの布団を占領して、高いびきをかいていても、気にはならなかった。

秋の午後、叔父はぼくをサーカスに連れて行ってくれた。金色の陽射しが穂を垂れた稲を輝かせている時季だ。

叔父に手を引かれ、町外れの広場を目指す。

背広を着込んだ叔父はいつもよりも早足で歩いていった。ぼくは彼と歩調を合わせる度に、何度か転びそうになるくらい小走りにならなければならなかった。

サーカスのテントは巨大に見えた。絶滅したはずの恐竜が広場にうずくまっているみた
いだった。テントのまわりにはのぼりがはためき、軽快な音楽が風に乗って聞こえてくる。
動物の臭いが強くなり、ぼくたちは人の群れに吞み込まれた。

次の瞬間、ぼくは冷たい座席に座り、光のなかから現れる美しいサーカスの世界に眩惑
されていた。

道化師、綱渡り、力自慢の大男、二頭の年老いた象、円形の舞台に次々と現れては消え
ていくサーカスの芸。

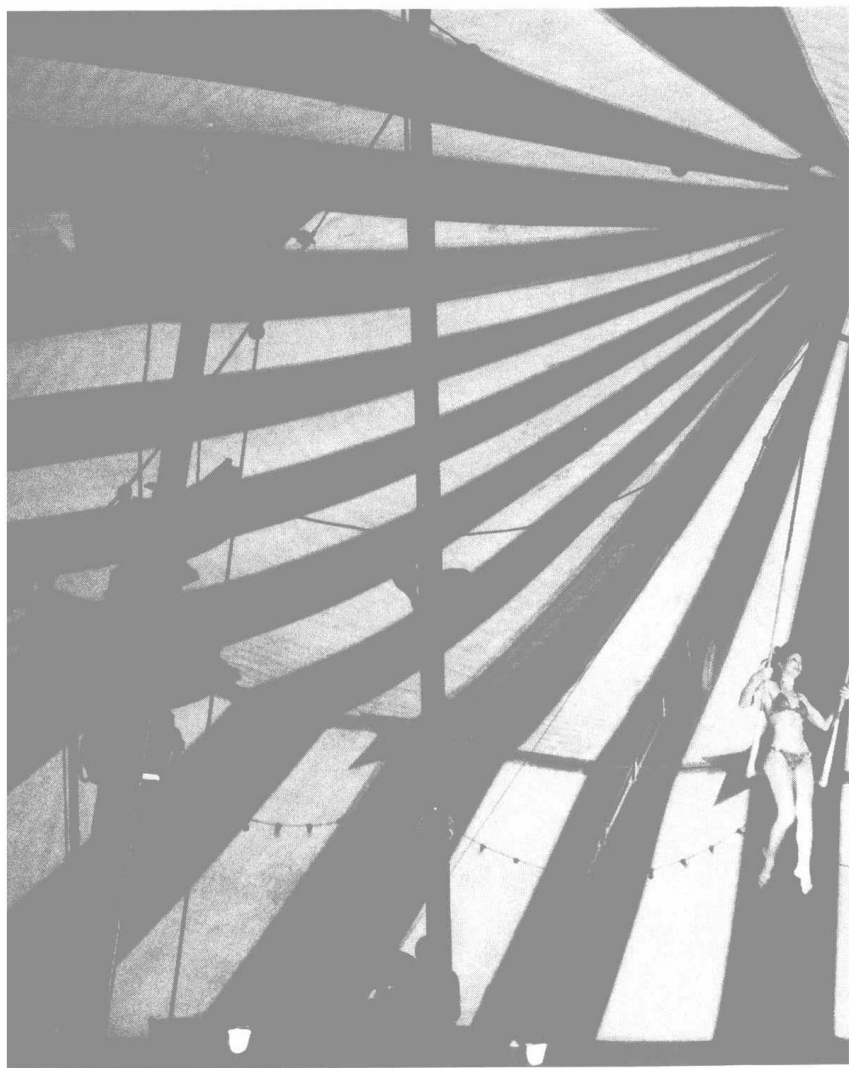
手にもった飴が溶けて、ぐずぐずになっていくのにも気づかず、ぼくはサーカスの芸に
熱中した。

幕間の休憩になり、叔父はぼくを仮設のトイレに連れて行き、手を洗わせた。水は冷た
く、皮膚の内側まで染みるようだった。

「楽しいかい？」

叔父が訊いた。なんだか少し憂鬱そうな顔をしていた。父親が夕食に遅れて帰って来た
時の顔に似ている。ああ、疲れた、と父親はいつも言う。ああ、疲れた。





「うん」とぼくはできるだけ元気良い声を出した。「すごく楽しいよ」

叔父は微笑を浮かべた。頬にくつきりと笑いじわが刻まれる。小さな子供の手を引いた女性が擦れ違いざまにちらりと叔父を見て、しなを作るように目をそらした。

叔父は女性からよくそんな素振りをされていた。けれど、彼は特に興味をひかれる様子もなく、ぼくの肩に手を置くと、軽く指先に力を入れた。

「終わったら、飯を食って帰ろう」叔父の声が耳元で柔らかく響いた。「だから、飴を握り締めるのは、もう止してくれよな」

ぼくたちは席に戻った。通路は雨水が何かで湿っていた。歩くと、靴の下でピシャピシャと音が出るほどだった。水は汚れ、動物の体から立ち上るような臭いがしていた。けれど、それは何故かとても好ましいものに感じられた。

休憩が終わり、場内が一瞬暗くなった。

ざわめきが収まり、観客は息をひそめた。

次の瞬間、華々しい音楽とともに舞台は輝くばかりの光に包まれていた。